

パウロの喜び (8)

2008. 3. 11 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

コリント人への手紙・第一 16章21節、22節

パウロが、自分の手であいさつを書きます。主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来てください。

ヨハネの黙示録 22章17節

御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

ヨハネの黙示録 22章20節、21節

これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。

今日は続いて、テサロニケ第一の手紙について考えたいと思います。テサロニケ第一の手紙のおもなテーマは、「主イエス様が再び来られる」ということです。最も大切なことではないでしょうか。

最近、私は非常に悩むようになってしまいました。度々経験することです。今回の大洗の喜びの集いに、ある母親と娘とボーイフレンドと一緒にみえました。娘は非常に若いのですが妊娠していたのです。結婚してから親しい関係をもつことは、「主のみこころ」です。しかしそれ以前は、みこころではありません。「罪」です。ですから、若者の行動は、社会の悩みの種になっているのではないのでしょうか。たとえ親がイエス様を信じていたとしても、子どもは自動的に救われません。若者はどのような気持ちで結婚すべきでしょうか。

二つの手紙をまず紹介したいと思います。まず、K・K兄弟と今のJ子姉妹なのですが。

主の御恵みにより結婚に導かれたことを主に感謝しつつ、新たな人生が主のために用いられるよう心より願っております。『しかり。わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来てください。」というみことばは、私たちの結婚指輪に刻むみことばです。この結婚式とこれからの二人の結婚生活を通して、福音が宣べ伝えられ、主の日が早められることを願っております。当初からJ子は、指輪のみことばはこれが良いと言ってお

りましたが、私自身は彼女ほどの思い入れはありませんでした。しかし改めてこのみことばを思い返したとき、ここには信仰が凝縮されていると気がつきました。第一に、主がみこころを語られた。第二に、ヨハネがみことばをそのまま信じて受け入れた。第三に、ヨハネがみことばに基づいて主に祈り願った。これこそまさしく信仰だと思いました。主が語られたことをそのまま素直に受け入れ、同意し、そのみことばに基づいて祈る姿こそ、真のキリスト者の姿でしょう。イエス様が迎えに来られることを真剣に祈り求めているかどうか、このことはキリスト者にとってとても重要なことだと思います。この結婚のお話をいただく前から、私はペテロ第二の手紙3章12節のみことばがよく気になっていました。「神の日が来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。」それゆえかはおぼえていませんが、昨年一月のJ子を紹介された日の前日に、実は私は自分の結婚について真剣に祈っていたのです。イエス様が迎えに来られるのを早めるために、必要ならば結婚できますようにと。そのような祈りでした。そしてその結果として、主は純子を紹介してくださいました。改めて考えてみますと、この祈りから始まった私たち二人の結婚ですから、冒頭の黙示録のみことばは、これからの結婚生活にふさわしいみことばなのだと思います。私たちの結婚が是非主の再臨のために用いられるようお祈りくだされば幸いです。

二人は、このような気持ちで結婚しました。もう一つの手紙は、A・M 兄弟と T 姉妹の手紙です。

5月5日、御代田福音センターで結婚へと導かれました。A・MとT・Hです。お忙しい中、私たちそして家族親族のためにお時間を割いていただき本当にありがとうございます。私たちの結婚指輪に刻んだみことばは、黙示録22章20節です。『これらのことをあかしする方がこう言われる。『しかり。わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来てください。』これは、これから二人で、間近に迫る主イエス様の再臨を待ち望む生活をしていきたいと思ったからです。聖書の一番最後にあるのでわかりやすいということもあります。また、式次第には次のみことばも書くことにいたしました。22章の17節と21節。「御霊も花嫁も言う。『来てください。』これを聞く者は、『来てください。』と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。」これは招いておられるイエス様を、式に来られるお一人お一人に知ってもらいたいからです。私(A・M)はある時姉妹(T・H)に聞きました。「結婚式と再臨、どちらが先がいい？」姉妹は迷わず、「もちろん再臨です」と答えました。僕自身はどちらが先でも素晴らしいと思っていたのですが、そうはっきり言われると正直びっくりしました。この人は本当にイエス様を愛している。尊敬できる人だと思いました。結婚式当日は、何十年ぶりの再会となる親族や友人が来てくれることになっています。その方々にも、是非イエス様の再臨を知っていただきたいと思います。イエス様だけがこの暗い不安な時代にあって本当の希望なのですから。そしてイエス様の再臨を待ち望むことこそ、本当の勤勉さと豊かな報いをもたらすのですから。当日どうぞ多くの人々の心に、今この

時も、主は豊かに働いてくださり、みことばを聞く備えがなされるように、お一人お一人が飢え渴きをもって式に臨むことができますように、是非お祈りください。最後に、主に喜ばれる家庭が築かれるよう、私たちのためにもお祈りください。

このような気持ちで結婚するようになれば祝福があります。皆ご存じでしょう、日本は最近アメリカ並みになってしまいました。結婚する半分以上の人々は離婚します。ちょっと辛いことがあれば、「嫌です。さようなら」。もし自己実現のために結婚しようとするならばうまくいきません。大変悲劇的なこととなります。ですから、若者のために、もっともっと集会として悔い改めなくては、また祈らなくてはいけないのではないのでしょうか。

「イエス様が再び来られる」ということは何を意味しているかといいますと、「主を待ち望め」ということではないのでしょうか。三つの質問について考えたいと思います。

第一番目。主のご再臨はいつになるのでしょうか。どなたが来られるのでしょうか。どのように来られるのでしょうか。

第二番目。夜の者とはどのような者でしょう。すなわち眠っている者であり、酔う者であり、また、無防備な者です。

第三番目。昼の者とはどのような者でしょう。つまり目を覚ましている者、慎んでいる者、また、完全装備している者です。

本当の回心のしるしは、「意識して主のご再臨を待ち望んでいる」ということです。そのことについてパウロは、「私たちはイエス様を待つために回心する恵みを与えられた」と言っています。

もう一度テサロニケ第一の手紙の1章に戻りまして、
テサロニケ人への手紙・第一 1章9節、10節

私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

と。

当時、イエス様が再び来られるということを知ることは、信者たちに対して大きな慰め、また勇気、そして喜びを与えたのです。それに比べて、こんにち私たちの場合はどうでしょうか。イエス様のご再臨を知って私たちは大いに喜ぶことができるのでしょうか。「主のみことばの真理」を本当に自分のものにする、必ず慰めと希望と勇気を与えられます。

今日はおもに、テサロニケ第一の手紙の5章の前半について考えたいと思います。

兄弟たち。それらがいつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。しかし、兄弟たち、あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶるとしてかぶって、慎み深くしていきましょう。神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。

*第一番目。主のご再臨は、いつになるのでしょうか。どなたが来られるのでしょうか。どのように来られるのでしょうか。

イエス様ご自身、つまり「十字架の上で犠牲になられ、救いの代価を支払われたイエス様ご自身が再び来られる」と明確に記されています。こんにちの青少年犯罪の問題、或いは現在の戦争の現実、将来この世界はどのようなことになるのかということに非常に心配し、憂えている人が大勢います。これらの問いに対してはどのような人間も、また、いかなる宗教も、答えを与えることはできません。ただ「神のみことばである聖書」だけが、答えを与えることができるのです。

マタイ伝24章8節を読むと次のように書かれています。

マタイの福音書 24章8節

「しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。」

すなわち別のことばで言いますと、将来世界は更にひどい状態になり、そしてそれはかつて一度もなかったような恐ろしいことになる、と聖書は語っています。そしてこの世に対する主の「さばき」が今までなかったとしても必ずその時が来る、ということです。

未信者にとっては、患難と不安、そして恐れに満たされる時が来ます。信じる者にとっては、言い表わすことのできないほどの喜びと救いが来るのです。イエス様がそのことをいつなさるのか、ということは大切ではありません。大切なことは、「イエス様ご自身が来られる」ということです。私たちはこのことで十分ではないでしょうか。テサロニケの兄

弟姉妹はこの「確信」を持っていました。これこそ本当の喜び、まことの望みの土台です。

例話ですが戦争が終わった後、ドイツの一つの都市で、爆弾によって廃墟となった所をしゅんせつ機が後片付けしていました。そして、しゅんせつ機が集めた瓦礫を、その後ろにいる労働者がスコップで傍らに放り投げていました。作業をしている最中に、どこからともなく時計のカチカチと時を刻む音が聞こえてきました。それを聞いた労働者たちは一瞬驚きました。なぜなら、その時計の音は時限爆弾に取り付けられる時計の音に間違いなかったからです。そこでその労働者たちは仕事を止め、そのことを警察に通報して、その辺りの大勢の住民たちを急いで遠く離れた所に避難させました。果たせるかな、その後で時限爆弾が大きな音を立てて爆発したのです。その労働者たちは時限爆弾に取り付けられた時計が時を刻むのを聞いて、それがいつ爆発するかはもちろんわからなかったのですが、必ずいつかは爆発するということを知っていました。

ちょうどそれと同じように、イエス様のご再臨がいつであるかわかりませんが、必ずいつか成就されるのです。なぜなら、主の時計は正確にその時を刻んでいるからです。それは、イエス様が「復活」なさったときから正確な時を刻み始めたのです。そして復活のとき、全人類にとっての最後の敵である死が打ち滅ぼされたのです。そのときこそすべての権威を持っておられるお方、つまりイエス様のご自身を啓示なされたときだったのです。ちょうどイエス様がこの世においては貧しく、人々に侮られたことが事実であると同じように、やがて栄光のうちに再び来られるということも同じく真理です。またちょうどイエス様を受難のとき、全く力なく（父なる神のみこころによって）十字架で血を流されたように、やがて絶大な力を持って現われなさることも真理です。また復活のとき、イエス様が死を打ち負かされたように、やがて天と地、また死者と生者に対する王として来られることも、事実です。

先ほど話しましたように、時限爆弾が仕掛けられてから一定の時が経つと、正確に爆発するのと全く同じように、「復活」なさったイエス様が、ある時必ず再臨なさることも確かです。なぜなら「復活」するという事実がまさに、再臨を証明する事実であるからです。もしも私たちがこの再臨について本当の確信を持っていなかったとしたなら、それは本当に悲しいことであるとしか言わざるを得ません。

次に、どのようにしてイエス様が再臨なさるかについて、パウロははっきりと書き記しています。すなわち、イエス様は予期しないとき盗人が夜突然来るように来られる、と言っているのです。盗人は、自分が盗みに入ろうとする時間をあらかじめ知らせるような愚かなことはしません。イエス様が今日再臨なさるということは全く考えられないとしても、それが実現することは確実です。そのことを考えるとき、私たちは心から喜ぶことができ、また力づけられるのですが、信じる者の中にもそのことを考えても本当に喜ぶことができないような人もいて、ということも事実ではないでしょうか。私たちの場合はいったいどうでしょうか。

また、いつイエス様が再臨なさるかについて、パウロははっきりと答えています。人々が「平和だ」、「無事だ」と言っているそのさなかに主が来られる、ということです。こんにちどこでも「平和」、「平和」、「平和」ということばが聞かれます。また大抵の人々は、だから安全だと思っています。しかし聖書は、そのように思い込むことが誤りである、とはっきり記しています。3節に書いてありますように、イエス様が再び来られることを確信して心から待ち望むことをしていない人にとっては、イエス様のご再臨はまさに滅びを意味しているのです。地獄を意味しているのです。

*第二番目。夜の者とはどのような者でしょうか。

すなわち眠っている者であり、酔う者であり、また無防備な者です。彼らは、イエス様は来ないと言うか、或いは当分来ないと言うかのどちらかです。しかし彼らがつとる態度の結果、或いは最後は、恐れ、患難、そして滅びです。ですから、彼らは希望なく、望みのない人間です。聖書のことばによると彼らは眠っている者であり、酔う者です。私たちは酔う者がどのような者であるかをもちろん知っています。酔う者は責任能力がなく、心身の状態が正常ではない者です。飲酒運転が見つければ、すぐに免許証は取り上げられてしまうのです。聖書の中で、未信者は酔う者にたとえられています。つまり、酔う者は自分が何をしているかはわかりません。未信者も提供されている救いを拒むという全く愚かなことをしています。自分の状態に気がつかないでいるのです。なぜなら、イエス様を拒むことの結果は滅びに至る、ということを知らないでいるからです。また聖書は、救われていない人々は眠っている者だと記しているのです。ですからイエス様を待つことをせず、主のみことばを真剣に受け取ろうともせず、愚かにも自分勝手な道を行こうとしているのです。

イエス様をまだ体験的に知っていない人には、当然次のような問いが起こってくるのではないのでしょうか。「光の子」になるためにはどうしたらいいのか、と。

聖書には、生まれつきの人間について次のように書かれています。

ローマ人への手紙 3章23節

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、

「すべて」と書いてあります。「すべて」は「すべて」です。

イザヤ書 64章6節

私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。

ここにも、二度も「みな」と書いてあります。結局例外なくということです。光の子となるためには、自分自身の罪だらけの状態、失われた状態を認め、告白し、それから離れることが必要です。

ソロモン王は次のように言ったのです。

箴言 28章13節

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。

「罪を隠す者は」とは、告白しない者です。

次の一步は、まさに主のみことばを信じることです。理解することではありません。信じることです。例えばエペソ書1章7節はすばらしい約束です。

エペソ人への手紙 1章7節

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。

イザヤ書 43章1節

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」

このようなことばは、罪人の私たちには理解できないことばかもしれません。しかし、信じて受け取るなら、奇跡を経験します。

マタイの福音書 9章2節

すると、人々が中風の人を床に寝かせたまま、みもとに運んできた。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。」と言われた。

病人の信仰ではないのです。「彼らの信仰をみて」なのです。

もう一箇所、

ヨハネの福音書 5章24節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」

その次の一步は、罪のために尊い血潮を流して贖ってくださったイエス様に感謝することです。しかも感傷的にそうするのではなく、聖書に書かれている主のみことばのゆえに感謝することが必要です。

最後の一步は、イエス様を隠さずに恥ずかしがらずに、どこでも公に告白し、証しをすることです。

ローマ書の10章から、2、3節読みます。

ローマ人への手紙 10章9節から12節

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。

*第三番目。昼の子とはどのような者なのでしょうか。

テサロニケ人への手紙・第一 5章6節

ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。

とパウロは書いたのです。すなわち目を覚ましている者、慎んでいる者、また、完全装備している者です。つまり、待っている者です。彼らは望みと喜びに満たされているのです。主は来られると確信しているからです。

テサロニケ人への手紙・第一 5章8節

しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶととしてかぶって、慎み深くしていきましょう。

胸当てとかぶとを身に着けている者は、「光の子」です。すなわち、非常によく装備している者です。

ここで「胸当て」とは、どのような意味でしょうか。それは「イエス様を信じる信仰」と、「イエス様に対する愛」との胸当てです。すなわち自分により頼むことをしなくなり、すべてを主イエス様にゆだね、何ものにもまして「イエス様を第一」にし、「誰よりもイエス様を愛する者」だけが完全な装備をしている者であり、どのような敵に対しても立ち向かうことができる者です。

また「かぶと」とは、イエス様が必ず来られるという「確信」と「喜び」のかぶとです。「イエス様は今日来られるかもしれない」という待ち望みを持っていない者、またそのようなかぶとを身に着けていない者は、弓矢で射られたり、刀や槍で傷付けられやすい、非常に危険な状態にあるのです。

これらの武具、つまり「胸当てとかぶと」とは、まさに主の賜物以外の何ものでもありません。

しかしあらゆる賜物は同時に、その中に一つの「課題」或いは「使命」を宿しているのです。賜物はいつも目的をもって与えられるものです。「目をさまさない」「慎んでいなさい」と。

眠っている者には意識がありません。ですから近づく危険を感じ取ることができません。闘いを放棄してしまっているのです。更に酔っている者とは全く無防備の状態におかれているのではないのでしょうか。

私たちは、いったい

- ・「光の子」なののでしょうか、それとも「夜の者」なののでしょうか。
- ・眠っている者でしょうか、目をさましている者でしょうか。慎んでいる者でしょうか。
- ・生き生きとした望みを持っている者でしょうか。喜びに満たされている者でしょうか。
- ・よく装備されている者でしょうか。それとも酔う者でしょうか。
- ・望みのない者、或いは不安に満たされている者、全く無防備な者でしょうか。

私たちは「イエス様のご再臨」というこの不可思議な「真理」について考えてきました。それは私たちにとって何を意味しているのでしょうか。

*まず、「イエス様が再臨なさる」ということ。この事実は私たちに決断を迫ります。

イエス様は私たちとの出会いを望んでおられますが、私たちはこの「イエス様を今受け入れる」か、それとも「拒むのか」、今日こそ、その決断をする絶好の機会です。もしそうでなければ、後になって必ず後悔します。「イエス様の時限爆弾」が爆発する時まで待つことは、全く遅すぎることであり、また、愚かなことなのです。

*二番目。「イエス様が再臨なさる」というこの事実は、私たちがイエス様に仕えることを迫ります。

自分だけのことを考えて、のんびりと楽な生活を楽しむための時間はもはやなくなりつつあるのです。私たちは「イエス様のために」実を結ぶように召されているのではないのでしょうか。「イエス様のために実を結ぶ」ということは、他の人が「永遠のいのち」をもつことができるその「きっかけ」を与えることになるのです。

*三番目。「イエス様が再臨なさる」というこの事実は、私たちを不安から引き出すのです。

しかし大多数の人はそのことで心配や不安になるために「将来のこと」を考えようとはしません。もし私たち信者が将来のことで思い煩い、心配するとなれば、それは「イエス様に対する不信頼」の現われです。「あなたがたが思い煩ったり恐れたりする必要はない」とイエス様ははっきりおっしゃっています。

もう一箇所読んで終わります。

ヨハネの黙示録 1章17節、18節

それで私は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった。しかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。

「死とハデス」とは、死者の国のことです。

「生きているもの」すなわち「イエス様」は再び来られるのです。もし私たちが、今日、すべてのことをイエス様に明け渡しおゆだねするならば、「主のご再臨」という「真理」を心から喜ぶことができるに違いありません。

了